「湖畔の美術館より」①

挿絵の魅力
―文豪と画家―

洞爺湖芸術館では、大正から昭和にかけて発行された限定本・初版本のコレクションを展示しています。今回はその中から1点を紹介します。

本は読むものですから、主役はあくまで文章なのですが、文章を引き立て、読者のイメージを膨らませる重要な脇役が「挿絵（さしえ）」です。永井荷風（ながい・かふう）の代表作のひとつ『濹東綺譚』（ぼくとうきだん）は、東京・隅田川の東に位置した繁華街を舞台に、そこで生きる女性と主人公の揺れ動く感情を描いた小説ですが、画家・木村荘八（しょうはち）が挿絵を描き、さらに評価が高まった作品です。

木村荘八は1893年東京生まれ、岸田劉生や高村光太郎の影響を受けながら、ふるさと東京を描き続けた画家です。ペンを用いた独特の画風で、生活の匂いを漂わせる下町の情景を見事に表現し、新聞挿絵の仕事にも「毎日百万人の読者を相手に展覧会を開いているようなもの」と、力を入れました。

作品のイメージに影響する挿絵の力。洞爺湖芸術館で、美しい挿絵を辿ってみませんか？

■開館時間：9時～5時まで（月曜日休館）

■入館料：個人大人300円　高校生　200円　小中学生100円

■問合先：洞爺湖芸術館（洞爺町96番地）87-2525

『濹東綺譚』昭和12年 岩波書店

洞爺地区で開催 縄文フォーラム

「縄文遺跡群を世界遺産に」とアピール

6月8日（日）、「縄文遺跡群を世界文化遺産に！」縄文フォーラムが洞爺地区で開催されました。

とうや水の駅で行われたPRイベントでは、湖から、縄文シャーマンを乗せた舟がやって来て、聖なる水を汲んでくるという設定で、アフリカ太鼓「トヤトヤ」の演奏に合わせて、縄文シャーマンによるパフォーマンスが行われました。

午後からは、洞爺総合センターに場所を移し、環境考古学という分野を開拓された国際日本文化研究センターの安田喜憲教授により「縄文の心を取り戻そう」と題した講演会が開催されました。

安田氏は、花粉の分析によって縄文時代の環境を復元しました。縄文時代の人々は、森の時間とともに生きていたということが明らかとなったのです。自然の豊かな日本列島で、自然の恵みを大切にして生命を尊び、自然と共生した縄文文化の意義を、世界史的な視野のなかで捉える内容に、参加者は興味深く聴き入っていました。

縄文文化の意義を講演

厳かに「カムイノミ・イチャルパ」執り行う

6月21日、歴史公園のアイヌ民族慰霊碑前で、北海道ウタリ協会胆振地区支部連合会（加藤忠会長）が主催して、伝統儀式「カムイノミ（神への祈り）・イチャルパ（先祖供養）」が執り行なわれました。

サミット開催が先住民族としてアピールする絶好の機会と捉え、当町での開催を決定し、管内の各支部から約70人が参列しました。

最初に民族衣装を身に着けた参列者が、火の神に対する祈りを捧げ、続いてサミット成功を祈願し、最後に先祖への供養を行いました。

各支部からは、古式舞踊が披露され、厳粛な空気が全体を包み込みました。

厳かに執り行われた
カムイノミ・イチャルパ